

学生編集委員 × 土木 = 土木と社会のコネクター

[WEB取材] 新学生編集委員

[取材協力者] 浅野太我、下岡優希、中尾優文、宮田比奈

連載「かける土木」では他分野からみる土木に焦点を当て、他分野と土木を掛け合わせることでどのような可能性が生まれるのかを、インタビューを通してお伝えしていきます。第10回となる今回は、今年度から学生編集委員になった浅野さん、下岡さん、中尾さん、宮田さんにインタビューを行い、土木に対する学生視点からの想いを聞きました。

——土木を学びきっかけを教えてください。

浅野——私は高校三年生の時に建築を学びたいと思い大学に進学しました。最初は建築志望でしたが、佐々木葉先生（早稲田大学）の著書である『ようこそドボク学科へ！』を図書館で読みました。本の中に土木写真家の大山顕さんのコラムがあり、「土木の良さは現場を実際に行かないと分からない。」と書かれており、今まで土木に興味がなかった私は初めて地元ダムに行きました。そして自然を相手に大規模な仕事を行い、多くの人に恩恵を与えるのが土木なのかと感銘を受け、土木を学ぼうと思いました。

下岡——私は大きなきっかけが二つありました。一つ目は中学三年生の時に自宅近くの海に橋が架かる工事に

見てかっこいいと感じたのと同時に東日本大震災があり、土木の

大事さを目の当たりにしたことで、二つ目は尊敬する先輩が工業高等専門学校に進学し、話を聞くと身近な自然現象が数式で表せることを知り、自分もやってみたいと思い土木を選びました。

中尾——私は明石高専の先生による学校説明を聞いたことがきっかけです。私は淡路島出身で1995年に発生した阪神・淡路大震災の話を幼少の頃から聞いており、防災に興味を持っていて、高専では中学校を卒業後すぐに専門的なことを学べることに



図1 2020年度土木学会学生編集委員（下岡委員作）

が当時の私にとって魅力的で、土木に進学しました。

宮田——私は幼い頃からものづくりが好きで理工系の分野に進みたいと考えていました。高校二年生の時に地域の市役所が開催していた熊本土木ツアーに参加し、熊本県のダムや高架線の道路を見学させてもらったとき、自分が知らなかった地元のことを多く学びました。そして何より土木は地元の熊本にとっても貢献していると強

く感じ、私も地元のために貢献したい
 と思いい、土木を学ぶ決意をしました。

——土木を実際に学んでイメージは
 変わりましたか？

浅野——土木を学ぶ前はデザインを
 するのが建築、理詰めが土木、という
 イメージでしたが、実際は土木と建築
 で学ぶ要素に大きな違いはないと感じ
 ました。しかし、土木は数学科のよう
 に難解な数学を解く機会は少なく、経
 済や社会学などの分野と関係してお
 り、文系・理系を包含する学問という
 イメージに変わりました。

下岡——私が土木を学ぶ前は、数式で
 自然現象を表現できて「かっこいい」
 というイメージでした。しかし、授業
 で学ぶにつれて設計などは自分に向い
 ていないと感じ、徐々に「かっこいい」
 イメージから「つらい」と思うようにな
 りました。しかし、土木は他にも多
 くの分野があるため、自分の得意分野
 を見つけだし、「かっこいい」土木を多
 くの人に伝えたいと思うようになり
 ました。

中尾——正直、土木はブラックな業界
 だと思っていました。周りも「ゼネコ
 ンやコンサルはブラックだ」と言ってい
 ました。しかし、実際に大学三年生

の時に建設会社のインターンシップに
 参加して、昔と比べて近年は働き方改
 革も進み残業もそれほど多くないと
 伺い、このイメージは一変しました。

宮田——私は土木といえばダムや堤
 防に関わるのだろうと漠然としたイ
 メージしかありませんでした。しか
 し、学びを進めていくにつれて、コン
 クリートや都市計画、河川整備なども
 土木であり、土木が携わる分野の広さ
 に驚きました。そしてこれら土木の中
 の他分野の研究についても積極的に学
 び、土木分野全体として高めあう姿勢
 が魅力的だと感じました。

——現在の土木業界に対して思うこ
 とはありますか。

浅野——私はもつとかっこいい業界
 になってもらいたいです。例えば、土
 木業界は人手不足だから人をどんど
 ん採用しようという話があります。し
 かし、ただ単に頭数をそろえるだけで
 なく「土木技術者ってかっこいい、私
 もなりたい！」と積極的に選ばれる
 業界になってもらいたいです。そのた
 めには土木人が元気になり、対外的に
 露出を増やしていく必要があると思
 います。

下岡——今の土木業界は多くの先輩

方が積み重ねてきたものが大きく、良
 くも悪くも伝統的だと思います。これ
 からは、新しいテクノロジーなどを用
 いて若い人が土木を新しい時代へ引ッ
 張っていった方がいいのではないでしょ
 うか。

中尾——収賄や談合、手抜き等の昔の
 悪い印象が土木業界のイメージを下
 げていると感じています。土木は人命
 的にも経済的にも大きな影響を持つ
 ので、このような負のイメージを減ら
 していったほうがいいです。

宮田——私は土木技術者として働く
 とき、個人のスキルを高めたい人がた
 くさんいると感じます。現在、キャリ
 アアップの転職が土木業界でも浸透
 し始めていることを若者にもどんどん
 発信してほしいです。

——学生編集委員として今後どのよ
 うなことを伝えたいですか。

浅野——土木は実務と学問のつなが
 りが分かりにくい気がします。例え
 ば、せん断破壊について「突然壊れる
 脆性破壊である」と大学では習いまし
 た。対して実務の世界では、地震発生
 時に高架橋でせん断破壊が生じると、
 高架下の人が逃げ遅れてしまいます。
 そうならないよう、脆性破壊させては

いけない明確な理由がありました。こ
 のように、目の前の事象と実務の世界
 が、どう関係しているのかをつなげる
 役割を果たしていきたいです。

下岡——私は、土木学会誌はまだ専
 門誌の域を超えていないと思います。
 より多くの人が学会誌を通して土木
 に対して関心を持ってくださるよう
 に編集委員として活動していきたい
 です。

中尾——私は自分たち土木学生の研
 究をピックアップして、他の多くの同
 世代に知ってほしいです。そして、中
 高生向けに大学生や大学院生の研究
 を紹介して土木への進路を選択する
 人が増えてほしいです。

宮田——土木で働く人たちを紹介す
 る機会は少ないと思います。私たち学
 生編集委員は土木人と一般人の感覚
 を半々で持っている特殊な立場とし
 て、土木に関わらない方々からも愛さ
 れる学会誌を作っていきたいです。

学生編集委員一同——「土木と社会の
 コネクター」として頑張っていりま
 すので、今後ともよろしく願いたい
 します。

(担当編集委員…深澤英将、田中万琳)